

Title	明治前期の他者認識を巡って : U. S. グラントー行 訪問に錯綜する眼差しから
Author(s)	ガラシーノ, ファクンド
Citation	日本学報. 2014, 33, p. 203-221
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27049
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

明治前期の他者認識を巡って

——U. S. グラント一行訪問に錯綜する眼差しから——

ファクンド・ガラシーノ

はじめに

- 1 先行研究の整理と批判、並びに本稿の課題
 - 2 グラントの世界一周旅行を取り巻く事情
 - 3 グラントの見た日本：アジアとの対比から
 - 4 ヤングの見た日本：Around the World with General Grant から
 - 5 グラントの日本訪問をめぐる眼差し：出版物に現れたグラント
 - 6 グラント訪日と民衆の眼差し
 - 7 コレラ騒動をめぐる民俗的な想像力
- 終わりに

はじめに

1879（明治12）年6月21日、ユリシーズ・シンプソン・グラント米国元大統領（Ulysses Simpson Grant 1882-1885）が長崎に来航した。グラントは南北戦争の際北軍総司令官として北部の勝利を率先し、戦後は1869年から1877年にかけて、2期にわたって大統領を勤めた人物として知られている。そして任期を終えてから、グラントは2年間あまりを費やして世界一周の旅に出た。その際、欧州各国やエジプト、パレスチナ、インド、タイや中国などを遍歴して、帰国する前の最後の目的地として日本を訪れている。日本では、かつて国家元首の地位に就いた人物としてグラントはイタリアやドイツの皇族の来日という前例に準じて、「国賓」相応の歓待を受けることになる。これを契機に、政府高官や有力市民

が中心となって、朝野を挙げてのグラント一行はまさに空前の出来事となってゆく。

一方、グラント一行が訪日した1879年というのは、1877（明治10）年の西南戦争や1878（明治11）年の大久保利通暗殺、1879年の琉球処分といった画期を経て、日本の近代化が新たな局面を迎えようとしていた時期であった。さらに1879年9月より井上馨が外務卿となると、いわゆる鹿鳴館時代が幕開けするとされている。欧米先進諸国との「不平等条約」を改正し主権国家を確立する目標のため、文明化＝西洋化された自己演出はますます前景化していく。そしてこういった欧化主義の自己演出とは、欧米列強による従属化の危機を前にして明治政府が採用し、社会的にも大きな影響を及ぼした近代化の一側面を顕わにしているに過ぎないと言える。

というのは、近代化過程のなかで、欧米諸国並みの技術や制度とともに「文明・進歩」を始めとする理論や価値が導入され、創出されていく国民を統合するイデオロギーのうちに内面化されるのに伴って、これらは新たなアイデンティティを定着させていくからである。その結果、欧米への眼差しはもろろん、日本列島で旧態依然の生活を続けている人々への眼差しや、いまだ近代化を遂げていない近隣アジア諸国への眼差しもまた規定されずにはすまなくなる。

1 先行研究の整理と批判、並びに本稿の課題

上記に示した文脈を踏まえれば、グラント一行の訪日は自己と他者への錯綜する眼差しという観点から日本の近代化について再考するモーメントとして改めて脚光を浴びることになる。そのため本稿では、

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

様々な資料を通してグラント一行の世界旅行に着目し、自他をめぐる眼差しという問題意識を出発点に日本訪問の位置づけ、意義や問題に関して考察を進めていく。その際、グラント自身が各旅先で記した日記類や私信をはじめ、一行の随行書記を勤めたジャーナリストのジョン・ラッセル・ヤング（John Russell Young 1840-1899）が著した旅行記や、さらには当時の日本の新聞やグラントを紹介するために出版された通俗的読み物の類などを分析していく。そうすることによって、多様な主体がそれぞれ持った自他への眼差しや、そしてそこから派生した実践を掘り起こし、日本列島における近代国家と社会の確立過程のなかでの他者・他者性の問題を再考するきっかけとしたい。

これを受けて、以下ではまず先行研究を整理してみる。最初にアメリカ史や日本史の分野に関わる研究に言及して、後に近代成立期の日本における自他認識を扱うものに触れる。

アメリカ史の分野では南北戦争や、グラント政権と大きく重なる「再建期」の文脈でグラントを論じているものが少なからずある。ただし、自他認識の問題を論じるに当たって、筆者はむしろグラントをめぐって展開されたイメージ、表象や想像力を検討した Joan Waugh の *U. S. Grant, American Hero, American Myth* に取り分け注目したい。そこで Waugh はグラントの軍人や政治家としての歩みを辿りながら、19世紀後半から20世紀にかけて、アメリカのナショナル・アイデンティティや南北戦争をめぐる歴史表象と記憶のなかで、グラントの英雄神話がどのように作られかつ展開されたのかを検討している。さらに、グラントの世界一周旅行を論じる際に、これは歴史研究のなかで長く無視され、または自己満足に終始した放蕩旅行として軽視されてきたと指摘しながら、アメリカ当時の内外政治のなかで旅行の持った意義を再検討したことは特筆されるべき論述である¹⁾。

次に Michael Fellman による *Around the World with General Grant, Abridged* を見てみよう。これはヤングの旅行記 *Around the World with General Grant* を要約し、序文や多少の解説を施したものである。解説において旅先の政治的背景と同時に、ヤ

ングの記述やグラントの言行が批判的に検討されている点が興味深い。その他、グラントの往来書簡や見聞録、日記や覚書の類、そして彼の発言や演説を取めた新聞記事や記録など、いわばグラントに関する総合的資料集となる *The Papers of Ulysses S. Grant* があり、これは本論文にとって主要な資料の一つとなるのは言うまでもない。

以上のような研究はグラントの生涯やその歴史的な位置づけなどを考える上で基礎資料になるのは間違いないが、他方ではグラント一行が各地で他者に向けた眼差しのありようや、逆に各地で一行に向けられた眼差しの問題に関して言えば、いずれも初歩的な次元に止まっていると指摘しなければならぬ。さらに、一行を迎えた側の視点までを取り入れ、双方の視線を根本的に対話させた先行研究は、管見の及ぶ限りまだなされていない。このように以上の研究状況に照らして、本稿の問い立ては一定の意義を帯びてくるであろう。

次に日本史の分野に入ってみよう。明治期の風俗や世相を語る著作と資料集の類のなかでグラント訪日への関心は少なくない。とはいえ、多くの場合に記述が断片的であったり、逸話の次元に止まったりして、分析や議論の深度は全体として充分ではないと指摘せざるを得ない。そのほか、岩倉使節団のアメリカ訪問や、琉球帰属問題をめぐる清国との対立といったテーマ、さらには明治前期の芸能史・演劇史のなかでもグラントが多く登場する。その際、大統領として彼が岩倉使節団を迎えたことや、1879年の東アジア訪問の折に琉球所属問題を巡って日清間の調停を試みたこと、そして岩倉具視に対して能楽を始めとする古典芸能の維持保存の必要性を助言したことなど、政治、外交や文化交流におけるグラントの役割が評価されている。

そのようななかで宮永孝訳『グラント将軍日本訪問記』に取り分け注目したい。これはヤングの旅行記のうち、日本訪問の部分を取り取って（第二巻の40章から44章まで）、これを抄訳し、かつ豊富な解説を施した著作となっている。そこでは、宮永が新聞や外交資料の精密な調査を通して一行の日本での活躍や、天皇と官僚などとの交流の詳細を掘り起こし、かつ内外の政治状況との関連に言及するなど、

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

評価に値する点が多い。さらにグラントとヤングの略伝を綴り、日本におけるグラント関係の文献を整理することなど、本稿の調査をするに当たって貴重な先行研究であることは間違いない。

とはいえ、世界一周旅行という全体のなかで、日本訪問の部分のみを切り取るという議論構造については、問題提起の視野や記述の幅などにおいて大きな限界があると指摘しなければならないだろう。というのは、世界一周のなかでの最後の一部である日本訪問を全体から切り取ってしまったのは、仮に議論の範囲を日本訪問に限定したとしても、これが占める位置や提起する問題を十分に捉えられるとは考えがたいからである。本稿では世界一周の全てを論じるほどの余裕はないが、インドや中国など、他のアジア諸国に関する記述との対比で日本訪問を改めて題化する課題は引き受けなければならないように思う。

最後に、近代成立期の日本における自他認識を扱う研究に触れておく。近代化とともに近世的な華夷思想が解体され、それに代わる自他認識の価値基準として西欧起源の「文明」が登場し、その反射・補完項として絶えず「野蛮」が設定されてきた過程は、多くの研究が議論してきたところである。文明開化以降の日本社会のヘゲモニックな価値観として、ひろたまさきは西周「人世三宝説」を取り上げ、「健康・知識・富有」の3つに要約している²⁾。こういった価値観は人間の欲望を自然なものとしえ肯定したうえで、合理的な動力を通して、その欲求の充足は幸福につながるという考えを形成させたという。日本の近代社会はこれらの価値観の追及と実践を唯一意義ある営為とする風潮を生み出し、他方でこれに不協和し、あるいはこれを妨害し対抗するとされた存在を排除・差別した。具体的には、不学や無知とされた者、不合理とされた精神障害者、さらに民俗的な習俗や信仰、興宗教などは近代的衛生観念から不潔とされた病者や娼婦、そして救済とともに矯正の対象とされた貧民など、これらは近代日本の内外にわたって発見・創造された他者である。本稿でもまた、グラント一行の訪日に交叉した眼差しを探り、自他認識を問題にする際、「文明・野蛮」の二項対立的な図式が多く登場せざるを得ないだろ

う。そこで、多様な主体の眼差しの微細な動きに着目し、そのなかで二項対立を複雑化し、やがてこれを相対化・克服するための視野を開拓していくことに努めなければならない。

2 グラントの世界一周旅行を取り巻く事情

1869年から1877年に及んだグラント政権は絶え間ない汚職や不祥事に見舞われて、さらに1873年に世界規模の恐慌が襲いかかる。満期後、グラントは政界から一時的に離れるが、恐らく公的な立場での更なる活躍を視野に入れつつ、非難から逃れると同時に、かつ政治的に無難なかたちでお一定の注目を集める立場を確保する手段として、海外渡航が構想されたと考えられる。したがって、世界旅行はグラント一個人としての私事ということになる。しかし、当時のグラントの名声はあまりにも大きく、程度の差こそあれ旅が行く先々ですます公的な性格を帯びることとなった。このようにアメリカ海軍が一行の移動に船舶を提供して、一行が各国政府に迎えられることになった。そのお蔭でグラントはヴィクトリア女王やビスマルクから、ラーマ5世や李鴻章までと面会して、優遇されながら各国を遍歴することができたのである。

日本でも、こういった状況に注目し、ドイツやイタリア皇族の来日という前例に準じて、グラントを国賓として、すなわち国家の正式な客として待遇することになった。当然のごとく、ここにはアメリカ政府に対する友好姿勢のアピールという企図が含まれていた。グラント一行は1879年6月21日長崎に上陸して、ここで数日滞在した後、瀬戸内海を航海し駿河湾に寄港した後、7月2日横浜に上陸する。横浜で盛大に歓迎された前大統領はさらに特別仕立て列車で東京に向かい、宿舎として指定されていた浜離宮の迎賓館・延遠館に入る。そして9月3日に蒸気船「シティ・オブ・トウキョウ」で帰国の途に就くまでの間、グラント一行は東京と横浜を数回行き来し、さらには日光や箱根、豆州三島などにも旅している。

グラントは数回にわたって明治天皇に謁見したほか、政府の最上層部や華族、民間の著名な人物、各

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

国の外交官や在日外国人とも交流した。外務省が一行の「接伴掛」として当時の駐米公使・吉田清成や、旧宇和島藩主・伊達宗城などを任命した。さらに、東京府会会長・福地源一郎と商法会議所頭取・渋沢栄一が筆頭となって、商工業界を指導する実業家や区長層などの有力市民から構成される東京府民代表の接待委員も形成された。なお、組織化の度合いや規模の差こそあれ、グラントが訪れる各地でもやはり同様の動きが起こった。それに加えて、グラント一行が訪れた各村や町の住民はしばしばその周辺に群がり、町中を飾ったり、山車を曳いたり、踊りや芝居を披露したりするなど、ほぼ祭礼に等しい雰囲気醸し出し、国賓の接待に勤め、もしくは動員された。

3 グラントの見た日本：アジアとの対比から

旅をしていくなかで、グラントが挨拶や祝辞を述べる際、アジア各国の「古き文明」に敬意を表わす文言を割り込むこともあった。しかし、彼の言葉を細かく分析すれば、その関心の所在に辿り着くはずである。グラントが世界各地に向けた眼差しとは、野営を長年張り続けてきた軍人という偵察の視線、そして土地を管理してそこから利益を生まなければならない、いわば官僚や実業家の視察という眼差しであったと言える。以下ではグラントの言葉を辿りながら、彼がインド、中国や日本に向けた眼差しを確認していこう。

どこを旅しようともグラントが最初に注目したのは現地の地形や地質であった。あたかも経済開発や生産活動の新たな可能性を探るかのよう、グラントが各地の資源や立地条件などを吟味してはその意見を述べた。例えば、キリスト教徒の聖地・エルサレムに近づくグラントの感想を見てみよう。ヤングによれば、それは以下のようなものであったという。

The valley which over we have ridden strikes the eye of the General as one of the richest he has ever seen, and he makes the observation that the plain of Sharon alone, under good government, and tilled by such labor as could

be found in America, would raise wheat enough to feed all that portion of the Mediterranean³⁾

上の引用でグラントの注意をまず惹いたのは、土地とそこに住む人々をいかに生産性のある目的に向けて活用するのか、という問題である。彼にとって、勤勉に働いて産業を興し、身の回りの物質的生活条件を改善して、以て経済的な豊かさを生み出すということは、あらゆる社会にとって価値のあるものであった。19世紀の欧米先進諸国では、人間の努力次第でどのような社会も改善の余地があるとする「進歩」をめぐる観念が広く共有されたが、アメリカ大統領を務めたこの人物も当然その例に漏れていない。

もっとも、これは欧米近代の社会や経済システムを無条件に肯定し、かつその優越感を表した思想であるのは間違いない。このようなグラントは、エジプトやインドを旅していくなかで、大英帝国による現地の資源開発や植民地統治の成績を評価し、行政や治安維持、貿易と宣教、そして教育活動や技術指導などに携わる欧米人と交流した。そして後述するように、そうした交流のなかで、アジアに在住する欧米人への敬意とともに、彼らとの同属意識とも言うべき意識が徐々に表面かしていく。カルカットで植民地統治の実況を一通り視察したグラントが友人に宛てた書簡にその印象を次のように語っている。

...I have now a very good idea of India, its people and the effect of English rule...while progress in the direction of civilizing the natives has been very slow I believe that if the English were to withdraw the whole population would return to barbarism at one bound. The people are inferior to our North American Indian. The English who are sent here to direct government are, so far as I have seen them, a very superior set of men.⁴⁾

グラントはインドとそこに住む人々に対して、植民地支配者と同質の眼差しを注いでいたと言わな

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

ればならない。グラントがインドの人々を自らの手で秩序を保てない野蛮人と見なすと同時に、インドに対する植民地支配を肯定するのみならず、一定の評価をさえ与えているのである。ヨーロッパ諸国は「文明化の使命」という理念を掲げて、自己を規範とした発展の軌道に自力ではとうてい乗れないとされた地域に対する植民地主義的膨張を正当化する言説を築いていったが、グラントの対アジア認識にはそれに共通するものは少なくない指摘できる。

それに対して、中国に対する評価は異なる要素を示している。彼が友人への書簡のなかで中国旅行の印象を以下の通り語っている。

...I have visited the principle sea coast cities in China and Peking in the interior...China stands where she did when her ports were first open to foreign trade. I think I see dawning however the beginning of a change. When it does China will rapidly become a powerful and rich nation. Her territory is vast and is full of resources, agricultural & mineral...The population is industrious, frugal, intelligent and quick to learn. They are natural artisans and tradesmen. From Bombay to Hongkong they monopolize all the trades (...) They cannot do so well however in their own country. They must have the protection of a better and more honest government to succeed.⁵⁾

グラントは開港したにも関わらず中国にそれほどの進歩が見られないと最初に消極的な評価を与える一方、中国の広大な国土と豊富な資源に着目するとともに、中国人の可能性を見込んでいる。彼の目に中国人は質素にして勤勉であり、工業と商売においては天然の才能を備えた鋭敏な人々として映った。そのため、彼らは自らの手で自国の発展を切り開く可能性を秘めていると、好意に満ちた姿勢を見せている。このような文脈のなかで、近代的軍事・工業技術の導入に積極的な李鴻章や恭親王という、洋務運動を進める実力者に対してグラントが高く評価し、支持する姿勢を取ったのである。

とはいえ、一部の開明的官僚や商工業に携わる人々を評価しているも、清国政府そのものに対して批判はもとより多かった。グラントから見れば、非能率で時代遅れの清朝政治は外部からの脅威に太刀打ちできないとして、本格的な近代化のためにも抜本的な政治的改革が必要であるとしている⁶⁾。このように、グラントの中国に対する部分的な評価は、現状と言うより将来の発展の可能性に向けたものであったと理解できる。

さて、次にはグラントの日本に対する眼差しを確認しよう。日本滞在の折、一行は各地最新の軍事、行政、教育、産業や司法の施設に案内された。たとえば、長崎では長崎公園内で開かれていた博覧会を視察し、翌日には裁判所や長崎県庁、師範学校などを訪れている。さらに東京では、東京女子師範学校、文部省や上野博物館、東京裁判所や内務省、大蔵省や警視局などを視察している。そして日光から帰京する途中、関係者からの招待に応じて足利地方の民営製糸工場を訪問した。こういった光景はグラントに深い印象を刻むことになる。現に、グラントが書簡を通じて友人や家族に対して日本の目覚ましい進歩の様子を伝えて、称讃を惜しまない。なかでも、近代的教育制度の定着に向けての努力が日本の進歩を物語る象徴として取り分け高く評価された。

There is nothing they are prouder of than their institutions of learning, from their common schools up the highest college, including their Military & Naval schools. There is no country where the arrangements are more complete for giving every child, male and female, a fair common school education than in Japan. Their higher institutions compare favorably with those of the oldest countries of the highest civilization.⁷⁾

さらに、すでに述べたように、グラント一行は各地の有力市民と交流し、彼らから盛大な接待を受けた。グラントの目の前には有司貴顕が集う夜会や饗宴の光景は、文明のもたらす進歩が如実に体現される場として映ったようである。友人に送った書簡の

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

なかでグラントは次のように日本上流社会の印象を綴っている。

.....The gentlemen connected with the government in any way, and many merchants and other people, dress in European style, and not unfrequently the ladies do also. The Japanese are altogether the superior people of the East.⁸⁾

前述したように、1879年の9月に井上馨が外務卿になると、いわゆる鹿鳴館時代が始動するとされている。しかし、そこでグラントが向けた眼差しとは、欧化主義を語る欧米人訪問者の認識として一般にイメージされるものとは著しく異なっていることに注目したい。異国情緒に飢えて極東の孤島にきた多くの訪問者が近代化する日本に幻滅し、あたかも欧州の擬態を演じているかのように見えた日本人を軽蔑することは現にしばしばあった。その典型例として、フランスの小説家ピエール・ロチが好んで言及される。1883（明治16）年、鹿鳴館の舞踏会に参加したロチは、開場してから僅かに3年経つ迎賓館の不自然な新しさを揶揄して、さらに上流社会の日本人が披露する洋装姿を手厳しく記述をしている。彼にとって、洋服を着た日本の紳士や貴婦人たちは「全員が猿に見えて仕方がなかった」という⁹⁾。従来和服が育んだ身体は洋服とどのような葛藤を起こしていたかというのも興味深い。ロチに代表される洋装姿の日本人へのあからさまな軽蔑は、東洋は自己とは異質でエキゾチックな場所ではなくてはならないとする幻想への裏切りより生まれる不機嫌のように思われる。

以上のような眼差しとは対照的なものとして、グラントの認識を改めて位置づけることができるだろう。東洋の神秘を探るのに関心のないグラントにとって、日本人が欧米の風習を内面化していく事態は文明の進歩や定着の一環として評価に値する事実であったに違いない。現に、上の引用で見たように、洋服は「進歩」に結晶される理念を具現化する装置として、いわば形ある文明として捉えられているのである。それだけではなく、積極的に文明を身にま

とう日本の有司貴顕はグラントをして、日本人はオリエントに傑出した民族であると言わしめている。

以上のように、インドや中国への評価に比べて、グラントが日本をアジアのなかで一段と高く置いていたことが分かる。しかし、かといって、グラントが接待者に対して対等な視線を持っていたかと言うと、疑問が大いに残るのである。というのは、インドの事例で確認したと同様に、日本でもまた、グラントが白人エリート層と交流するなかで、現地社会に対する優越感を共有することを禁じえなかったからである。長崎で外国住民に歓迎されるグラントは、祝辞を答えて次のように表現している。

It is very gratifying to me to have this welcome from the foreign residents of Nagasaki on the occasion of my landing in Japan. It has long been my wish to visit Japan, a nation which has always interested me for whose efforts to advance in all the benefits of our civilization the American people have had so much sympathy (...)¹⁰⁾

上の挨拶は何の変哲もない、平凡で儀礼的なものに見えるかもしれない。しかしここでは、日本が欧米と対等に渡り合えるように摂取しなければならない価値基準とは、実際「我々」のものである、という認識が零れ落ちている。現に、タイ、中国や日本などという近代化を迫られていた地域でのグラントの発言に注目すると、彼が文明の伝道者という感覚を持っていたことに気づく。中国ではグラントが外国語、自然科学や国際法を講じた清国政府の教育施設・同文間を訪問した際、彼が当時の館長であったアメリカ人宣教師のウィリアム・マーチンに案内されたが、そのときの演説のなかで、グラントが次のように述べている。

I have been struck with nothing so much in my tour around the world as with the fact that the progress of civilization - of our modern civilization - is marked by the progress of the English tongue. I rejoice in

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

that fact (...)」¹¹⁾

世界各地の文明化の度合いは、その地域の英語の撰取の度合いによって表現されているのだとして、遠い中国でも政府が英語教育に尽力していることへの喜びを隠さない¹²⁾。グラントが日本の教育施設から深い感銘を覚えたことは上に述べた通りだが、友人に当てた別の書簡のなかで日本における英語教育の普及と実績に触れて、日本人の英語教師がすでに何名かいることが取り分け強調している¹³⁾。アメリカの友人と日本での英語教育の進歩について語ることが彼らの間に同じような自負心を育ませたであろう。ここでは、近代文明の世界伝道を担うのは「我々」アングロ・サクソンであるという意識が垣間見えているとよい。以上のように、近代化しつつあるアジアを訪れたときに、さらには現地や本国の欧米人との交流のなかで、アジアの一部への評価を含めると同時に、優越感という不均衡を顕わにしてみよう眼差しが生まれた。こういった視線は、「文明・野蛮」という近代化がもたらした自他をめぐる二項対立を複雑化する一つの契機として、更なる考察のため念頭に置きたい。

4 ヤングの見た日本：Around the World with General Grantから

次にヤングのテキストを検討することにしよう。ジョン・ラッセル・ヤングは『ニューヨーク・ヘラルド』新聞で編集員や海外特派員を務めたジャーナリストとして知られている。彼がロンドンで旅行途次のグラントに会い、一行に加わるようになった。これをきっかけに、グラントの各地での言動や諸人物との交流の仔細を定期的に同新聞で報告していくのに連れて、やがてグラントの随行書記としての地位を確立するようになる。こういった記事が人気を集め、ヤングが帰国早々に*Around the World with General Grant*（2巻）というグラント一行の旅行記をまとめる流れを作った。

ヤングがアジアを訪れて以来オリエントに興味を持つようになったと言われているが、その時点でアジア諸国に関して深い知識と理解を持っていたとは言えない。むしろ、当時一般に流布していた書物の

言説やイメージを絶えず参照しながら、オリエントでの差異の経験を記述していったように見える。なお、オリエントへの関心は後にヤングを駐清公使の地位までに導くことになる（1882～85）。世界一周旅行をきっかけに清国で李鴻章と友好関係を結んだことが見込まれ、グラントも当時のアーサー大統領（Chester Alan Arthur 1881 - 85在職）にヤングを推薦した。さて以下では、エジプト、インド、中国や日本の記述を通してヤングが如何に他者を眼差したのかを見ていきたい。まずはヤングの他者を記述する姿勢を確認する点から始めよう。

In my wanderings round the world I am more interested in what reminds me of the old times, of the men and the days that are gone, than of customs reminding me of what I saw in France¹⁴⁾

上記は長崎の済福寺において裕福な市民の主導で行われた饗応の宴というくだりの導入部分に当たる。ここで、パリに代表される西洋世界の最前線というよりも、むしろ過去の日々やそこに生きた者たちを思い起こさせる事柄の方に関心がある、とヤングが語っている。そのため済福寺の饗宴は「日本の昔ながらの暮し」を垣間見させてくれる場面として、以降念入りに描かれていく。

日本に限らず、世界旅行を通して出会う風景や人物を前にして、ヤングが遠近の過去の記憶を遡及する姿勢を始終一貫させていると言ってよい。たとえば、エジプトでは、「宿舎のなかにさえ浸透しているフランス流の作法や慣習の侵略」から逃れるべく、ナイル川の「ロマンと伝説」を求める探検の旅に出て、古代エジプトの繁栄を偲ばせる多くのモニュメントを遍歴した。アビドス遺跡を前にして、ナイル川が数千年にわたって灌漑した古代帝国の厚い歴史に感銘を受けた彼らは「世界のあらゆる文明の揺りかご」の前に脱帽した。その他、ギリシャやイタリア半島でも、古代の栄光を物語る遺跡の眺めはヤングの胸を打ち、西洋文明の起源とされる過去の偉大な遺産に触れる想いを旅行記に記述している。

他方、インド、中国や日本では、往時を遡及する

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

眼差しはモニュメントではなく、太古から連続と受け継がれてきた「伝統」を体現する人々の営みのなかで追い求められた。遠いアジアの地では、暮しのなかでの慣習や生業、宗教儀礼や社会制度などが過去の姿をそのまま表している、あるいは過去そのものであるとされた。こういった認識は、例えば古代から存在するインドの聖なる都市ワラーナシーの記述のなかで鮮明に現れている。

(...) We are in presence of a living and a continuous civilization, in whose presence even Paul was of yesterday, and whose influence has been felt for centuries in our Christian world. Dynasties have fallen, empires have passed away, cities have been sacked. The Englishman quarter his troops in the palace of the Peacock Throne, and the descendant of Timur lives in Burmah on a pension of three thousand dollars a year; but the literature, the religion, the customs of Hindostan are as firmly planted as they were twenty centuries ago (...)¹⁵⁾

中国でも同じように、眼前の風景は太古の姿をそのまま伝えていと認識された。古代から蓄積され、現在に至るまで各時代の挑戦に耐え抜いてきた変わらざる伝統を強調することは、英語圏における中国表象の一般傾向であり、ヤングもその例に漏れていない¹⁶⁾。旅行記のなかでヤングは複雑で異質な、かつ広大な世界としてイメージされた中国文明に触れたときに感じた魅惑とともに、西洋文明より遥かに古いものに圧倒される思いを以下のように記した。

Farewell, and again farewell to the land of poetry and romance, antiquity and dreams, of so much capacity, of so little promise, whose civilization is in some things a wonder to us, and in others a reproach. We are but as children in the presence of an empire whose population is ten times as large as ours, whose dominions are more extensive, whose records

have gone back unbroken and unquestioned to the ages of our mythology (...) Ancient, vast, unyielding, impenetrable, China sits enthroned in the solitude of Asia, remembering that she was in her splendor before the Roman Empire was born, and that her power has survived the mutations of every age¹⁷⁾.

しかし明治という時代に日本を訪れたヤングにとって、眼前の風景から過去の姿を遡及・欲求する眼差しはまた異なる回路を通らなければならなかった。なぜならグラント一行は近代化と直面することになったからである。ここで前述した済福寺の饗宴の場面にもう一度注目しよう。もっとも関心を惹かれるのは往時を偲ばせるものであると告白した次の文に、ヤングはこのように書いている。

All that reminds you of the old times is passing away from Japan. Here and there you can find a bit that recalls the days when the daimios ruled, when the two-sworded warriors were on every highway....All of this is crumbling under the growth of modern ideas. The aim of Japanese statesmen is now to do things as they are done in London and Washington, and this impulse sweeps on in a resistless and swelling current....¹⁸⁾

ここでヤングは日々浸透していく欧米の精神や制度を前にして日本固有の風景が失われていく現状認識を記している。そのため、饗宴の様子を細かく書き留めたのは、そこで垣間見られた「日本での昔ながらの暮し」はますます珍しい光景になっていくと思われるからなのかもしれない。19世紀後半に訪れた多くの欧米人は、近代化する日本と距離をとり、西洋文明がいまだに届いていないとされる農村部などに目を向けた。そこでは、すべてが小さくて繊細な妖精の国のような、平和で美しい楽園という元禄期のケンベル以来のイメージを欲求する眼差しが受け継がれていたと言えよう。こういった眼差しの系譜には、ルソーなどロマン主義的啓蒙思想家以来の

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

欧州文明の醜悪への自己嫌悪があり、それに対して西洋文明に汚染されない地域を純粹無垢な野蛮人の住まう楽園と理想的に描く心性があった、とさらに指摘することができる¹⁹⁾。

出雲の宗教習俗や伝承から魂の故郷である古代ギリシャと共鳴する雰囲気をえぐりだし、失われた楽園を捜し求めたラフカディオ・ハーンがその典型例の一つといえる。少し後世になるが、ハーンが日本学者のチェンバレンに当てた1894（明治27）年9月22日付の書簡のなかで、同年7月に成立した日英通商航海条約が今度日本への影響が懸念されている。治外法権の撤廃とともに内地開放を制定したこの条約の結果、アメリカ産業社会流の功利主義が日本の繊細な生活様式を押しつぶし、フロック・コートとネクタイ姿の日本人が「平民的な日本」古来の純朴な心性を墮落させる、といった展望を描いたハーンは悲哀に満ちた嫌悪を表している²⁰⁾。

それに対して、ヤングがこの状況を日本社会の発展に必然の道と評価する点において、独自の主張を展開している。彼は欧米の技術や制度の導入に勤しんでいる人々の努力を肯定し、時として賞賛さえしている。上に引用した箇所続きは以下の通りである。

God forbid that Japan should ever try to arrest or turn back the hands of her destiny. What was picturesque and quaint in the old time can be preserved in plays and romances. This century belongs to the real world, and Japan's incessant pressing forward, even if she crushes the old monuments, is in the interest of civilization²¹⁾.

日本古来の優雅で稀有な美を体現した文物は劇や文学のなかで保存すればよい、19世紀は現実の時代であり、たとえ日本が近代化のなかで過去の美しい遺産を踏みじりにしても、それは文明の発展のためなら許される、と彼はいう。この箇所ではヤングの西洋文明を普遍的な価値とする信念が現われていると言ってよい。しかし旅行記を読み続けるのに連れて、ヤングも西洋文明に汚染されていない地方の

風景やその住民に目を向け、維新変革以前の過去の姿を欲求している展開に出会う。つまり、近代化を肯定するにも関わらず、ヤングが東洋を記述する規範をなお踏襲しているのである。例えば、長崎から横浜への海路の途中、一行が駿河湾の清水と静岡の町々に立ち寄ったが、そのときにヤングは以下のように書いている。

The bay of Sumida²²⁾ is not open to the outside world, and we are only here because we are the guests of the Emperor...we are especially privileged in being allowed to come to a closed port, because we see Japan untouched by the foreigner. We have a glimpse of the land as it must have been before the deluge²³⁾.

開港地ではない清水や静岡は白人未踏の地として想像される。そこへ初めて踏み入ることができたのは、政府がそれを特別許可したからと、グラントの国賓としての地位や特権がとりわけ強調される。国賓という地位は、他の欧米人には出来ない特権的な体験としてここで語られている。その際、ヤングの目は貧困や惨めさに一切会わず、ただ太陽を愛する満足げな人々しか映っていない。田園や茶畑、街道沿いの民家や茶屋、町の商店と寺院など、ヤングの筆に留まるすべてのものが清潔と豊かさを表し、この快活な世界を作った農村の日本人へのヤングの好奇心と好意はあくことない。しかしこういった眼差しと、文明の定着のためなら古き日本が破壊されても仕方ないとする主張とはどのような関係にあるのだろうか。以下では、ヤングが考えるグラント訪日の意義に着目して、その認識に底流している認識に迫ることを試みたい。

One of the features of the revolution has been the awakening of the people, and this awakening has received a strange impulse from the presence of General Grant.... In some respects this is the feature of our visit most worthy of consideration. The future of Japan of course depends much more upon the

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

freedom, the education and the independence of the people than upon any other agency. And while the courtesy of princes and gentlemen is worthy of note, and has been marked with princely grace, the part taken by people is memorable²⁴.

上記でヤングは明治維新以降の広汎な変化を振り返り、そのなかでグラント一行の訪日を位置づけている。ヤングによれば、僅か10余年前に封建体制のなかで生き続けていた日本の人民は、今や国家を担う主体として目覚めつつあるという。現に、今回のグラント訪問に当たって、為政者や華族のみならず、人民の姿も取り分け際立っている。彼らは自由な意志を持って公の生活に参与し、国家と社会の発展を担おうとしている、とヤングは言う。これは日本における民主的精神覚醒の吉兆として絶賛の対象となっており、そのなかでグラントの訪日はこの民主化を加速させるできごととして意義を持つことになる。

こういった具合に、有力市民主催の接待や各地住民による歓迎は、「市民」になりつつある日本人民が主体となった外交行事として解釈された。例えば長崎や日光などでそうだったように、人民主体の接待行事は古き日本の舞台装置や作法で行われても、それらは紛れもなく日本における文明の進展と定着という論理の内に理解された。こう考えるならば、長崎の寺院での宴や街道の茶屋も、東京の官庁や兵舎への視察も同一の眼差しによって覆われることになる。こういった文脈で清水湾や長崎のくんだりとは、古き日本が小説や芝居のなかでの存在になる前の最後の輝きを味わいながら、アメリカ本国の読者に提供した特権的な体験の記述として位置づけることができる。

そしてその際、他者との遭遇は同時に、読者とともに自己アイデンティティを再確認する可能性をももたらしたことに注目したい。ペリー提督による開港以来、アメリカが日本の国際社会への参入や近代化に向けて取り分け重要な立場を占めてきたとする日米関係観が存在していた²⁵。ただし、ヤングが考えるグラント訪日の意義に戻ると、前大統領が日

本に伝授しているのは技術や制度ではなく、アメリカが独自の価値観として自負する民主主義そのものであったという認識に辿ることができる。このように、アメリカの読者と共有されたオリエントでの差異の経験は、自由、平等と民主精神に立脚する「理念の共和国」としての自己アイデンティティを更新する装置として浮上してくる。こういった認識は、自己の文明度を保証するのに、補完項となる他者を「野蛮」の領域に追いやる二項対立的な思考とは異なる眼差しとして念頭に置く意義があるだろう。これを一つのきっかけとして、近代成立期における自他をめぐる眼差しの更なる議論を探らなければならない。

5 グラントの日本訪問をめぐる眼差し：出版物に現れたグラント

次に、当時の出版メディアがグラント一行を軸にどのような眼差しを展開したかを、新聞を中心に検討していきたい。アメリカの前大統領グラントが日本を訪問するという情報は、1879年1月からすでに報道されており²⁶、一行の歓迎や接待に向けての協議や準備の様子がしきりに掲載されている。そして一行の日本滞在中にいたっては、グラントの公的な場での言動はもちろんのこと、その僅かな一挙手一投足さえもが事細かに新聞紙上で記述されるようになる。以下では、グラントとはどのように紹介されていたかを検討しよう。グラントの東京への到着を取り上げた『朝野新聞』の記事のなかで、以下のように記されてある。

殊にグラント君は米国の有名大將且つ政治家にして、嘗て南北戦争の時に際し赫々たる偉勲を奏せしのみならず、其の後選ばれて大統領の職に就き、拮据勉強大に為す所あり。米国民の之れを尊び之れを愛する、華盛頓以後殆ど之れに過ぎるものなきなり²⁷。

南北戦争というアメリカ合衆国未曾有の危機においては輝かしい武功を立て祖国を救い、戦後は大統領に選ばれ、文事にも励んで功績を残したという、まさに「智勇を兼備せる良将賢司」²⁸という理想的

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

人物として、強い権威に包まれて登場している。このようなグラント像は、新聞やジャーナリズム一般から、より大衆的な読者層を狙った絵双紙などの通俗的読物の類にいたるまで、さらには数々の演説や挨拶・祝辞などにおいても、およそ公的な場面でグラントのイメージが想起される場合には、たいして変わることがない。たとえば、山田享次の編集による『米国前大統領可蘭の公伝』^{グラント}といった啓蒙的な著作の冒頭において、グラントは「剛毅にして正直、難に臨んで敢て屈託せず、一に其思想の向ふ所に随て進みしを以て為す所毎に成り、欲する所悉く達し、終に美国の大統領に選挙せられ、無常の光栄を其一身に負担するに至りし」人物として紹介されている。

もとより、このようなグラント像は決して日本に限ったものではない。南北戦争終結の前後、北部ではグラントが英雄として広く顕彰され、このイメージが後に欧州にも広まっている。したがって、日本の出版メディアにおける上記のようなグラント表象は、既存のグラント像を受容する過程で形成されていったと推測できる。そしてこのような偉大な人物が日本を訪れ、国家の正式な客として迎えられ、そのことを意義づける作業のなかで、グラント像は出版メディアのなかでさらなる展開を遂げていく。

次に、一行が横浜に上陸する前日（1879年7月2日）の『郵便報知新聞』の社説「米国前大統領グラントの来航」と題する記事を検討してみよう。そこで、グラントの世界漫遊の旅は公務を担ったものではないことが確認されている。にもかかわらず、欧州各国では「其人品経歴及地位の尋常探奇家の類に非ざるを以て、欧州各国到る処として大賓の礼を以て氏を迎せざるはなし」ことが強調されている。このように、グラントがいわゆる文明諸国から受けた待遇が意識されていたことが窺える。

グラント一行は欧州各国や清朝中国、タイにおいても政府高官から歓迎されたが、「東洋に於けるも亦交際の大法を解せざるもの外は皆十分の敬礼と愛情とを以て優待せざるものはあらざるなり」と同記事にあるように、アジア諸国の動向も意識されていたことが窺える。そこで、「交際の大法」を実践することで、アジアのなかで文明諸国と同じ地平に立つための課題が述べられている。ただしその際、

国賓の接待を担う主体は、為政者よりもむしろ「国民」でなければならないとする論理が展開される。続けて社説では、「抑氏は国民の大賓なり。国民一般に之を饗せざる可らず」と説かれている。というのは、そもそも「都府港市の人民は其都府港市の賓客として之を接待」するのは「欧米各国の慣例」とされているからである。そこで、各地の市民が権威ある来客の前で文明国であることを証明すべく、文明という価値基準を体現しなければならない。こういった文脈において、「我日本国民も亦既に氏の何人たるを知り又交際の大法を解し「文明国の慣例に通熟」している模範として、各地の夜会や饗宴などを準備している市民代表接待委員会が賞賛の対象となるのは当然のことであった。そして、すでに挙げたグラントとヤングの言葉を思い出せば、文明国の自己演出は成功したと言えるだろう。このように、国家の外交政策の一端を各地域で積極的に引き受けようとする住民は「帝国の榮譽」を全うすることが期待され、国家を担う主体としての「国民」になっていくのである。

さて「国民一般」がグラントと交流した具体的な場面はどのように取り上げられ、そこでどのような眼差しが展開されたのかを次に見ていこう。1879年7月10日に東京大学三学部の生徒への学位授与式が行われた。2年前に開成学校や東京医学校が合併し東京大学が生まれてから初の学位授与式となったが、ここにもグラントが招待された。『朝野新聞』では、その様子は以下のように語られた。

是れ明治十二年七月十日の夜、東京大学法理文学部に於て卒業の諸君に学位授与の大典を行なひし景況なり。斯の日、茲に会する者は皆有名の学士搢紳にして、一の雑客俗子を見ず。クラント君亦幸に來たつて賓たり（中略）（筆者注・なかでもっとも喜ぶべきことは）抑も生員諸君が多年螢雪の業を勤めたるより、今日に於て絶美なる結果を得て貴重の位階賜り、以て光栄を海の内外に顕はす（略）漁史（記事の執筆者、成島柳木のこと）一面の識無き人多しと雖も、亦之が為に拊舞して喜ばざるを得ず²⁹⁾。

上記で執筆者の成島柳木は、卒業生の長年の苦学の成果と、その成果が内外の者に認められることを喜んでいるが、同じ出来事を扱った『郵便報知新聞』でも、学位授与式に「朝野の名士」が勢ぞろいしたと報じられている³⁰⁾。いずれの記事でも、日本最初の学位授与式は「国家の大賓」グラントや外国人御雇い教師、文部大輔田中不二磨をはじめとする内外の「朝野の名士」を一堂に集めて盛大に祝うべき出来事として語られている。すなわち、近代的教育制度や学問の摂取の成功を象徴するこの場も国賓の前で行われる文明国の演出の一幕であったに違いない。

ただし内外の「有名の学士搢紳」が卒業生の成果を承認しているこの場は、「雑客俗子」を排除した特権的な空間として成立しているのに注目する必要があるだろう。すなわち、「雑客俗子」を排除することによって、日本の「有名の学士搢紳」と「国家の大賓」が初めて同じ地平に立つことが出来るという場のあり方がここで語られているのである。「朝野の名士」という特権階級が文明の視察者グラントと連帯感を持って自己を重ねることを可能にした営為のなかで、反射項として民衆を排除する運動に一定の比重を持ったことがこのように窺える。

7月8日に行われた工部大学校の夜会の報道にも上記のような自他を巡る眼差しの構造が現れた。その際、皇族や大臣、参議や諸頭官をはじめに、その他「有名の紳士、教導職、富豪の人々、外国公使領事、其他にて凡そ一千四百名」余りの者が会場に集まったと報告された³¹⁾。それに対して、「老若男女の群集」が延遠館から工部大学校に赴くグラント一行を見物するべく会場外に雑踏したと言う。翌日7月9日、横浜市民代表の接待委員による夜会の折、町会所の前は「老若男の群集すること女雲霞の如く」様子であったと言われている³²⁾。こういった華やかな夜会の様子を高揚した語調で記述している記者たちは、多くの場合「朝野の名士」の一人として招待され、文明が演出される舞台の内側から語る姿勢を取ったことに注目してよい。しかし、この空間から排除された者は、果たしてただ傍観するのに留まったのだろうか。以下では、民衆がグラントに発した眼差しの問題に取り組もう。

6 グラント訪日と民衆の眼差し

来賓を文明の使者や文武両道の英雄として表象したのが新聞だけではなく。グラントの経歴や人柄を紹介する目的で一行訪日の前後に刊行されたより大衆的な読物の類も同じであった。例えば、仮名垣魯文による『格蘭氏伝 倭文賞』という絵双紙のなかで、今まで述べてきたグラント像に加えて、日々仕事に励み、国家の一大事に臨んでは真先に自ら戦地に赴くグラントが見られる。こういった通俗的読物のなかで、グラントが愛国や武勇の鏡として描かれており、その半生が成功譚として構成されている。いわば「殖産興業・富国強兵」を担うべき国民の模範として、主人公の眼差しが読者に向けられていたのである。このように、グラントという米国の著名人の立身出征物語や成功譚は、当時の日本に広く読まれ新たな資本主義社会に成功するための労働・生活倫理の教科書とでも言うべき、中村正直『西国立志編』を彷彿させるのである。

上述の通俗的著作は、日米関係におけるグラント訪問の意義を啓蒙するとともに、貧しい皮革職人から同胞一同の敬愛を集めた一大国の長までに登り詰めた人の成功譚を模範として提供し、読者を奮起勉強させる目的があったことが以上のように確認される。しかし、こういった言説は実際どれほど有効性を持ち得たのだろうか。この問題を考えるため、1879年7月13日の『朝野新聞』に掲載された次の記事に注目したい。

人気の立つといふは妙なもので、此頃日本橋辺の仕事師共が親方とか頭とかいふ者の宅に集会し、今度アメリカから来られたグランド君といふ大将は、日本で言ふ時には太閤様のやうな強気な人だから、お上や人民が大切に取扱ふのだとよ、して見れば己っちも二分や三分は散財しても何か一番珍しな事をやつて見せてへ、と評議中消防道具を持出して、上野へ出掛ければといふも有り、階子乗りを願ふといふも有て様々なりしが、遂に上野へ通行の際、揃ひの袴天に揃ひの提灯で日本橋際に整列して大提灯と国旗の上げ下しをする事に決ったとかいふ。

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

上記から分かるように、権力者や上層市民がグラントに最大のもてなしを与えようとしていたことを、民衆は見逃さなかったのである。グラントがどのように、民衆の目の前に強い権威に包まれた存在として映ったのである。しかし、ここで取り上げられている東京の労働者がグラントに対して見せている認識とは「文明の視察者」でもなく、勤勉と愛国の鏡でもなかった。むしろアメリカの「太閤様」に相当するような、通俗化された英雄にほかならない。通俗的読物はグラントの「正直」さと同時にその「剛毅」さをも強調したが、報国の志を語るグラントよりも、戦陣で武功を挙げるグラントの方が民衆にとってよほど親しみやすかったのかもしれない。現に、ヤングによればグラントが一般的に「American Mikado」と呼ばれて、さらに好戦的な民族である日本人は何よりも来賓の軍事的な側面に興味を持ったという³³⁾。いずれにせよ、民衆の間でもっとも広く共有されたグラント像とは、『太閤記』の豊臣秀吉と同じような、卑しい出自から身を起し、その戦功によって天下を取った剛毅で勇敢な武将、という通俗的な英雄像であったと言えよう。

そこで、「お上や人民」の例に倣って、労働者が上野でアメリカの大將に「珍しな事」を見せることに決めたと記されている。「上野」とあるのは、東京府民の代表が「皇居に咫尺し奉る」ことの「天恩」に応える面目で、8月25日に上野公園で祝典を挙げて天皇を迎えた行事のことだが、ここにもグラント夫婦が招待された。その際、上野公園に赴く国賓は日本橋周辺の住民が掲げた大提灯に驚く。民衆がこのように祝祭空間を演じる実践に出た。すでに何回か触れた長崎・濟福寺の饗宴でも同じようなことが起こっていた。饗宴の主催者として有力市民こそが名を挙げていたが、そこで一般住民がくんち祭りに登場する籠踊りやその他の舞や芸能を披露した。他には、山で篝火が灯され寺院の付近で提灯行列も行われた。日光でも、一行が宿泊していた満願寺の境内へ住民が神輿を担ぎ込み、芝居や踊りも演じられた。その他、前節で述べた横浜の夜会に際して、「本町・弁天通りは戸毎に日米両国旗と日章の提灯を軒先きに掲げ、山車は所々の路傍にて賑やかに囃し立てた」様子であったという³⁴⁾。最後に、一行が

日光から帰京する途次、宇都宮では「土地の者が山車を挽きてワヤワヤと騒ぎ」立てたことを確認しておこう³⁵⁾。

上の事例を見る限り、祝いに出た者が日米関係の発展や「帝国ノ榮譽」といった国家目的をどれほど意識していたかは分からない。むしろ、いたるところで騒がれてきた外国のお上に対する好奇心や物珍しさが人々を惹きつけて、地域社会での歓迎を勢いづけたのであろう。グラントの人気の正体はおそらくこのようなものではなかったか。ただし、国家目的のために用意された言説と一定の距離はあっても、接待の場に立った民衆がグラントと彼を囲んだ有司貴顕の帯びる権威に触れ、その権威の基は近代文明にあると、少なくともも感覚レベルで意識する可能性が大きかっただろう。

それでもグラントの周辺に絶えず出現した祝祭的雰囲気から自らの祝祭願望を満たそうとして、人々は練物を曳き回したり、踊りを披露したりするなど、祭礼を彷彿とさせる民俗的なパフォーマンスを行ったのである。グラントが向かう中心は依然として有司貴顕の集う特権的な接待の場であったが、民衆が民俗的なものを媒介に、より周縁的な立場からにせよ国賓の接待に参加したことを指摘できるだろう。もっとも、ここで「民俗的なもの」と呼んでいるのは民衆の変わらざる伝統などではない。むしろ、日米国旗などに見られるように、近代国家の支配イデオロギーを宣伝する記号も同時に取り込まれていることを念頭に置く必要がある。ともあれ、民衆が楽しんで騒ぐ様子が新聞紙上に取り上げられ、市民による饗応の盛大さを強調するように、国賓接待の物語に回収されてしまう。このように、国賓接待の特権的な場から排除された民衆がより周縁的な地点で独自のパフォーマンスを広げたものの、それが結果的に文明国を演出する言説を補強する運命を辿った。しかし、民俗的なものがはらむ独自の可能性は別の文脈で発揮されることになったのである。

7 コレラ騒動をめぐる民俗的な想像力

すでに論じた通り、アメリカ前大統領グラントを国賓として迎えた日本政府の基本姿勢とは、官僚、華族や有力富裕の市民など、紳士貴顕を主体に文明

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

国としての体裁を全うすることであった。そこで、民俗的な事柄が往々にして国賓接待という回路を通して国家の公式文化の理論に再編成されることになる。しかし時として、民俗的なものが権力に敵対し、また権力から排除されることもあった。以下では、グラント一行が来日した1879年の夏に発生した明治期最大のコレラ流行と同時に巻き起こった「コレラ騒動」に注目したい。

1879年、西日本では6月からコレラ流行が始まり、東日本でも7月後半から蔓延するにいたったのである³⁶⁾。その際、16万2637の届出コレラ患者のうち、10万5786もの人が病のため命を落としてしまったと推定されている³⁷⁾。1877年にもコレラが流行しているが、そのとき内務省が「虎列刺病予防心得」を制定した。これによって流行地帯から入港した船舶の検疫、臨時避病院の設置やそこでの患者の隔離、そして患者を出した家屋の消毒などの対策が講じられた。こういったコレラ対策はさらに1879年の「虎列刺病予防仮規則」の公布を以て強化されることになった³⁸⁾。新しい規則では患者の発見と報告義務が明示され、さらには検疫委員の任命やその職務の範囲、避病院の設置、運営や患者の処遇、遺骸や汚染物の管理、そして消毒や環境整備に関する規定が明文化されている。その結果、患者の家への交通遮断が厳しくなるなど、地域への生活への統制監督がさらに強化される³⁹⁾。そこで、コレラ対策の行政を直接執行したのは、内務省の末端にあった警察組織であった。

1877年の流行において、東京で避病院に入院した患者の死亡率は69%であったと言われている。避病院とは高確率で生還できないほどの劣悪な環境にあったことはここから浮かんでくる⁴⁰⁾。当時コレラに対する有効な治療法はまだ開発されていなかったにせよ、人々から見れば避病院とは警察権力と密接に結び付いた、死のイメージが漂う恐ろしい場所であったに違いない。この不安の念は当時各地で広まったコレラをめぐる不気味な流言蜚語を通して確認することができる。そして興味深いことに、1879年の夏に広がった流言のなかでグラントがしばしば登場しているのである。

8月23日の『東京曙新聞』では、「隅田川の渡し

船」に乗り合った農夫が次のように噂していたと報道されている。彼らによれば、「病院は西洋の唐人に売る生胆を抜くと心得、グラント氏と香港太守ヘンネシー氏が胆一つに付金千円余に買上に来」たそうである。それに対して、やりとりを聞いた「物しる人」が農夫たちを諭そうとするも、ついに聞いてもらえなかった。ちなみに、この場面の導入部分では、「輦下」の東京府化ですらこういったありさまだから、ましてや遠く離れた僻地にいたっては、頑迷な人々がいるのは至極当然である、という具合に民衆に対する軽視の眼差しが顕著に表れている⁴¹⁾。

ヤングの旅行記のなかでも、横浜で起こったコレラ騒動が言及されている。ヤングによれば、コレラ対策として官憲は患者を病院に送り込む動きに出るが、病院に対して偏見を抱く人々が恐怖状態に陥ったそうであった。そうしたなかで、病院に送られる者は命を奪われ、その胆がコレラ魔除けとしてグラント、岩倉や三条実美などに千ドルで買い取られる、といった噂が横行したという。上述の新聞記事と殆ど同じ内容だが、東京周辺で当時こういった類の流言が広く聞こえたことを物語っている。

ヤングの記述が示すように、こういった不安のなかで、いわゆる「コレラ騒動」という民衆の動きが巻き起こるのも不思議ではなかった。その際、患者を隔離し、消毒や交通遮断などの衛生行政を強権的に推し進め、生活への干渉を強める医師や警察権力と民衆とが各地で衝突することになる。その際、コレラをめぐる噂がしばしば蜂起を組織する契機として機能した。たとえば、1879年8月18日、群馬県おうら邑楽郡川俣村に発端を持つ騒動はその一例である。そのとき、邑楽群17ヶ村の農民2000人が蜂起して医師や巡査に暴行を加えようとしたが、その契機となった流言のなかで、警察権力とともにグラントが敵対的な他者として想像されていたことに注目したい。8月23日『郵便報知新聞』に掲載された記事に沿って騒動の経緯を検討しよう。

群馬県邑楽郡川俣村では、兼ねてから囃してられていた噂によれば、コレラにかかった者は「一々病院へ入れ治療と名を付け、其実ハ右の患者を殺害して、胆を取り米客グラント氏へ高価に売り渡すの内約あるが故に、政府ハ医員巡査に内命を下して故

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

らに人を殺す」という。この状況のなかで、医員らがある患者に対して水薬を与えたところ、患者が「苦痛甚くして即坐に息絶え」てしまう事態が起こる。これを契機に、巡査や医員への疑惑がますます高まり、村中の者がこれ以降医師の診察を一切受けないことに決定したという。ところが、8月18日、巡査や医員らが診察を拒んだ者の説得に出た。当然のごとく、このときに耳を貸す者はいなかったため、巡査たちは一旦帰った。しかしその後、村人が「一坐同音に人殺しの者逃がすな、打取れと云ふ声の下に鐘を突き立てて立騒げば、村内は勿論、兼ねて示し合したる郡中十七ヶ村の百姓原銘々竹槍を携へて、駈集り医員巡査を突殺さんとて」、川俣村を去った行政官たちを追撃しようとしたのである。

一人の委員は危ういところまで追い込まれたが、何とかその場から逃げし館林警察署に報告する。すると、巡査とともに「館林市中の鳶人足を駈集め」た群長が出張して、自ら蜂起勢との交渉に向かうことになる。その結果交渉が成立し、暴力沙汰になる寸前で蜂起勢はひとまず解散したのである。蜂起勢が「仮令コレラ病患者あるとも検疫医員の診察を受けず、適宜の医師に掛り治療する事と、避病院入は御免を蒙り」といという要求を立てたところ、群長がこれを県庁に取り次ぐという約束で合意に達したという。

とはいえ、一時緊迫を極めた邑楽郡中の動向がさらに近在の栃木県足利・梁田両群の村々にも波及して、不穏な空気や官憲への疑念はしばらく続いたようである。そこで警察や足利郡長が流言を信用しないようにと説得に出回るも、両群にも避病院や検疫所の設立に反対する運動が活発化したのである。同じ『郵便報知新聞』の9月9日の記事によれば、邑楽郡板倉・海老瀬の両村にて、「浮説に迷ひ、嚴重の保護に疑念」を抱いた「愚民輩」が「虎列拉病屍焼場の事により紛争を起し、忽ち四百人計り嘯集して隊を組み、竹槍を携へて、蜂起する事件が再び巻き起こったという。ここで改めて館林警察署の巡査や郡吏が現場に出向かい「懇篤に説諭し、民情を斟酌」したため、暴力沙汰に及ばず事態が収まったと報道された。

以上のような状況から、1879年夏の関東地方に

おいて、コレラ対策をめぐって以前から存在していた医師や巡査への疑念と反感はグラント一行の訪問を契機に再燃した予測が立つ。現に、文明の視察者として意識された国賓の訪問に直面して、清潔で快適な環境を整えるべく住民の生活環境への監督や統制が強まったと考えられる。グラントの日光旅行に先立って、「順路通行ノ際、不都合無之様取計可申旨」が外務省から栃木県に内達されており⁴²⁾、それに加えて外務省から官吏2名が現地に派遣され、一行が旅行中に利用することになる旅館や休息所などの選定と視察を任された。さらにヤングの旅行記を見ても、旅筋の各村や町において警察や兵士などの治安維持部隊が欠かさず配置されていたことが窺える⁴³⁾。このようにグラントの訪問は祝祭の大義名分を与えたと同時に、地域社会に対する監視を強化させ、官憲との緊張を深刻化させる側面をも持ち合わせた指摘しなければならない。

国賓の訪問を前にした地域社会への監視統制とコレラ対策とが時期的に重なっていたことは上記のように確認できる。ただしその際、具体的な政策への抵抗を組織させる起爆剤として、衛生行政の担い手である警察や著名な外国人客グラント、そして彼を囲んだ官僚を悪質でまがましい他者・敵として幻視する眼差しが流言蜚語に結晶されていたことの意義を深く考えなければならないだろう。民衆思想史の分野で論じられてきたように、近世以来の民衆のコスモロジーからすれば、ここで流行病対策や衛生管理を中心に挙げた近代化政策とはそもそも、新政府官吏や新制度と技術の指導に携わった欧米人といった見慣れない異人たちがもたらす得体の知れない異物の集合体に他ならなかったのである⁴⁴⁾。こういった文脈で、不可解な政策が新権力への疑惑を爆発させた事件として、明治初期に繰り返されたいわゆる新政反対一揆が著名である。そこで、文明という価値を体現し、もしくは伝授しようとした者が異質で魔性の他者としての眼差しを向けられることになったが、上述のコレラ騒動も同じ軌道にあると考えられる。

人里離れた避病院という異空間への患者の隔離や石炭酸散布での消毒という新たな衛生対策とは、家人による看護や漢方での治療など、民衆が慣れ親し

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

んできた病気対処からかけ離れた強権的でほとんど理解不可能な装置であったことは間違いないだろう⁴⁵⁾。そこで、コレラ流行という生命への脅威が迫るなか、さらにコレラ対策が従来の秩序を崩壊の危機に追い込んだ矢先に、民俗的な想像力から他者・異人のイメージが呼び起こされ、秩序回復を目指す運動を組織するための言説を提供したのである⁴⁶⁾。その際、権力者と密約を交わしたグラントに代表される外国人が人の生胆を奪うまがまがしい異人として描かれたことは、1873-74（明治6-7）年のいわゆる血税一揆にも登場し、「血取り・膏取り」の説話や民俗伝承の異人から鑄型を取った想像力と同一の論理を見せていたと指摘できよう。民俗的な想像力に原型を持つ他者へのこういった眼差しは、グラントとその周辺に集う紳士貴顕の権威と価値を転化させた。その結果、グラントを際限なく賞賛した等質な視線に亀裂を入れようとする異質な眼差しが蜂起の勢いとともに登場したことに注目したい。

確かに、民俗的な想像力を持つ者は、文明という価値基準を振りかざすことで何らなかの権威を持ち、あるいは権威を志向するほとんどの者から「頑民・愚民」という常套句のもとで否定される運命を歩まざるを得なかったのである。現に、ジャーナリズム、警察や行政といった国家権力から、さらにグラントについて荒唐無稽な噂を囁す人々を「もっとも無知で卑しい層の人々」⁴⁷⁾と形容したヤングといった外国貴賓にいたるまで、これらすべての者が軽視の眼差しを共有した。しかしかといって、民俗的な想像が「文明・野蛮」という近代の二項対立的な自己認識の空間に異質な眼差しを打ち込んだことの意義を過小評価してはならない。コレラ騒動の流言飛語は、近代化の価値基準たる「文明・野蛮」とは異なる他者の経験として差し迫りつつ、それとの葛藤をくり返ししながら、自他をめぐる近代化の眼差しに痕跡を残すことになるだろう。

終わりに

以上、アメリカ前大統領グラントの世界一周旅行の一環として、1879（明治12）年の夏に実現した日本訪問に際して自己と他者をめぐる錯綜した眼差しを論じた。グラント一行が日本を訪れた明治

10年代初頭とは、西周が「人世三宝説」で説く「健康・知識・富有」といった価値に代表されるような「文明」を道標にして、新たな秩序建設が進められていた時期であった。本稿でも確認したように、あらゆる社会が到達すべき発展段階として西洋文明が揺るぎない模範を提供しているというのは、国賓グラントと彼を迎えた有司貴顕が共有した信念である。そのため、「文明・野蛮」という近代の二項対立的な自己認識がグラント訪日というできごとのなかで繰り返されたのみならず、国賓接待が成功したことから強化すらされたと言わなければならない。

しかし他方では、本稿を通してグラント訪日に関わった多様な主体の眼差しを注意深く分析することで、「文明・野蛮」といった近代の二項対立をさらに複雑化し、自己認識をめぐる新たな議論を開拓するための契機を同時に3つ確保することができた。以下では、その3つの契機を振り返りながら、そこから残される今後の課題を提起して結びに代えたい。

グラントが近代化しつつある日本をアジアのなかで一段と高く評価した場合にも、現地や本国の欧米人との交流を重ねる度に、彼を迎えることで文明国という同一の地平に立とうとした日本の官僚や融資貴顕に対する優越感という不均衡な眼差しを顕わにしたのである。そこでは、文明とはあくまで「我々」アングロ・サクソンに根源を持っているものとして定義された。そこで、文明化しつつある他者に一定の価値を付与して、自己と同様の価値を共有するものとみなすと同時に、その価値の源泉として自己を再定義するという、二項対立には必ずしも収まりきらない思考が表現されてあった。これを契機にして、今後の課題として問われなければならないのは、社会進化論や黄禍論をはじめとする、人種をめぐる新たな言説が交錯する19世紀後半以降の欧米と近代化を進めていくアジア・アフリカ・中南米やオセアニアとの連携、対立や他者を分かち線引きの所在と論点である。

さらに、アメリカの読者ととともにオリエントでの差異の経験を共有したヤングの旅行記では、西洋文明の価値基準を取り入れることで日々そのエキゾチックな異質性を失っていく日本に対する屈折した眼差しを窺うことができた。自国の前大統領に与え

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

られた優遇のお蔭で古き日本の最後の輝きを味わう特権がこうに語られるが、極東の島の固有美が消滅していく過程はここで悲嘆や憤慨の対象にはならず、むしろグラント訪日の意義を強調することで日本の文明化におけるアメリカの主導的な役割を主張し、自由、平等と民主精神に立脚する「理念の共和国」としての自己アイデンティティを更新する言説を展開していたのである。このように、自己の文明度を保証するべく補完項となる他者を「野蛮」の領域に追いやらないという点で上記に確認したグラントのそれと類似した認識をヤングの旅行記に読み取ることができる。古き日本を追求・欲求すると同時に代化しつつある日本を拒否・揶揄する姿勢を取らないヤングの旅行記は、オリエンタリズムやジャポニズムを新たな角度から問い直す契機となり得るだろう。

そして最後に、1879年夏のコレラ騒動に際して民俗的な想像力から他者に向けられた眼差しを通して、偉大な国賓像に亀裂を入れた、いわば文明化をめぐる価値とは異質な他者の経験に触れることができた。そこで文明の使者グラントは敵対的な他者として表象され、こういった言説は異人を排除することで独自の世界の秩序回復を目指した蜂起を組織する役割を果たした。ただし、こういった民俗的な想像力から生まれる眼差しと、「健康・知識・富有」といった価値に均質化された認識とはおよそ二項対立的にとらえられるべきではないだろう。むしろ、両者の葛藤や融合、進展や後退の狭間で紡がれていく近代日本のナショナル・アイデンティティを複雑化する一要素として理解するのが妥当ではないだろうか。この意味で、コレラ騒動といった民衆の闘争のなかで再び覚醒した他者への眼差しは、近代的な排外主義や人種偏見と差別、または例えば関東大震災の際に爆発した朝鮮人暴動の流言飛語や虐殺などといった問題とどのように結びついており、もしくは断絶しているかを問う方向に、議論を深める必要があるだろう。

注

1) Waugh, Joan, *U. S. Grant, American Hero*,

- American Myth*, University of North Carolina Press, Chapel Hill, 2009, 156p
- 2) ひろたまさき『差別の視線 近代日本の意識構造』吉川弘文館、1998年、94頁。
- 3) Young, John Russell, *Around the World With General Grant*, Volume 1, New York : Subscription Book Department, American News Co, 1879, p.329.
- 4) Simon, John Y., ed., *The Papers of Ulysses S. Grant*, Volume 29, Carbondale, Southern Illinois University Press, 2008, p.173, *New York Herald*, August 22th, 1879., p.104. “To Charles H. Rogers”, Calcutta, India. March 11th, 1879.
- 5) Simon (2008), p.190. “To Elihu B. Washburne”, Nikko, Japan. July 23rd, 1879.
- 6) Young (1879), p.443.
- 7) Simon (2006), p.184. “To Adam Badeau”, Tokyo, Japan. July 16th, 1879.
- 8) Simon (2006), p.188. “To Daniel Ammen”. Tokyo, Japan. July 16th, 1879.
- 9) E・ウィルキンソン 著、白須英子 訳『誤解 日米欧摩擦の解剖学』中央公論社、1992年、95頁。
- 10) Simon, (2008), p.173, *New York Herald*, August 22th, 1879. 下線部は筆者によるものである。
- 11) Simon (2006), p.141. “Speech”, Peking, June 5th, 1879.
- 12) Simon (2006), p.141. “Speech”, Peking, June 5th, 1879.
- 13) Simon (2006), p.189-191, “To ElihuB. Washburne”, Nikko, Japan. July 23rd, 1879.
- 14) Young (1879), Vol. 2, p.484.
- 15) Young (1879), Vol.2, p.109.
- 16) Yokoyama, Toshio, *Japan in the Victorian Mind : A study of Stereotyped Images of a Nation 1850-80*, Basingstoke, Macmillan, 1989, p.7.
- 17) Young (1879), Vol.2, p.381
- 18) Young (1879), Vol.2, p.484.
- 19) 百瀬響『文明開化 失われた風俗』吉川弘文館、2008年、8 - 11頁。
- 20) Hearn, Lafcadio, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, Edited with an Introduction by Elizabeth Bisland, London, Broughton Mifflin Company, 1910, pp.381-383.
- 21) Young (1879), Vol.2, p.485.
- 22) 駿河湾の誤りであろう。
- 23) Young (1879), Vol.2, p.516.
- 24) Young (1879), vol.2, p.569.
- 25) 五百旗頭真 編『日米関係史』有斐閣、2009年、18、26頁
- 26) 例えば、『読売新聞』1879年1月16日に「^{あめりか}米国会衆国の前大統領グラント氏は来遊の為今年の五月ごろに

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

- 日本に来られるとかいふ」という記事が第一紙面に掲載されている。
- 27) 『朝野新聞』1879年7月4日の論説「グラント君東京ニ来タル」。
 - 28) 『郵便報知新聞』7月2日の社説「米国前大統領グラント氏ノ来航」。
 - 29) 『朝野新聞』7月12日、雑録「東京大学三学部生徒学位授与式の景況を記す」。
 - 30) 『郵便報知新聞』7月12日、社説「記東京大学之盛典并告卒業生徒諸君」。
 - 31) 『朝野新聞』7月10日。
 - 32) 『朝野新聞』7月11日
 - 33) Young (1879), Vol.2, p.477, p.570.
 - 34) 『郵便報知新聞』1879年7月11日。
 - 35) 『朝野新聞』1879年8月2日。
 - 36) 杉山弘「コレラ騒動論：その構造と論理」新井勝絃編『自由民権と近代社会』「日本の時代史 22」吉川弘文館、2004年、149頁。
 - 37) 奥武則『文明開化と民衆 近代日本精神史断章』新評論、1993年、88頁。
 - 38) 奥（1993）89頁。
 - 39) 杉山（2004）162頁。
 - 40) 奥（1993）90頁。
 - 41) 荒木晶保 編『新聞が語る明治史』第一分冊、原書房、1976年、282頁。
 - 42) 『朝野新聞』1879年7月10日。
 - 43) Young (1879) Vol.2, p.555.
 - 44) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』2012年、平凡社、427-428頁、川村邦光『幻視する近代空間』1990年、青弓社、15頁。
 - 45) 奥（1993）94-95頁。
 - 46) 川村（1990）17-18頁。
 - 47) Young (1879) Vol.2, p.570.
- 参考文献**
- ・赤坂憲雄『異人論序説』、砂子屋書房、1985年
 - ・阿部安成「文明開化と伝染病 横浜という近代」『民衆史研究』第50号、1995年
 - ・荒木晶保 編『新聞が語る明治史』第一分冊、原書房、1976年
 - ・五百旗頭真 編『日米関係史』有斐閣、2009年
 - ・池内信嘉『能楽盛衰記』下巻「東京の能」東京創元社、1992年
 - ・石井研堂『明治事物起原』春陽堂書店、1996年
 - ・興津要「仮名垣魯文（二）その時勢順応主義」『文学』52巻、7号、1984年7月
 - ・ウィルキンソン、E. 著、白須英子 訳『誤解 日米欧摩擦の解剖学』中央公論社、1992年
 - ・太田実 ほか著『北米聯邦前大統領蔭蘭士氏成績記』鳴門堂、1879年
 - ・奥武則『文明開化と民衆 近代日本精神史断章』新評論、1993年
 - ・懐徳堂記念会 編『異邦人の見た近代日本』和泉書院、1999年
 - ・桂島宣弘『自他認識の思想史 日本ナショナリズムの生成と東アジア』有志舎、2008年
 - ・金城正篤「琉球処分は廃藩置県か」粟屋憲太郎 ほか編『日本近代史の虚像と実像 1 開国～日露戦争』大月書店、1990年
 - ・仮名垣魯文 和解、鮮斎永濯 画図『格蘭氏伝倭文賞』金松堂、1879年
 - ・川村邦光『幻視する近代空間』1990年、青弓社
 - ・倉田喜弘『芝居小屋と寄席の近代』岩波書店、2006年
 - ・国文学研究資料館 編『軍記物語とその劇化』臨川書店、2000年
 - ・小林丈広『近代日本と公衆衛生 都市社会史の試み』雄山閣出版、2001年
 - ・佐竹昭広『酒呑童子異聞』岩波書店、1992年
 - ・サミュエル・スマイルズ 著、中村正直 訳『西国立志編』講談社、1994
 - ・芝原拓自「対外観とナショナリズム」芝原拓自、池田正博、猪飼隆明 編『日本近代思想大系 12対外観』岩波書店、1988年
 - ・白根多助 ほか著『通俗観光余事』明文堂、1879年
 - ・杉山弘「コレラ騒動論：その構造と論理」新井勝絃編『自由民権と近代社会』「日本の時代史 22」吉川弘文館、2004年
 - ・立川昭二『病気の社会史 文明に探る病原』日本放送出版協会、1971年
 - ・富田仁『鹿鳴館 擬西洋化の世界』白水社、1995
 - ・中山和芳『ミカドの外交儀礼 明治天皇の時代』朝日孫分社、2007年
 - ・東京大学法学部明治新聞雑誌文庫 編『朝野新聞』（縮刷版）1981年
 - ・平川祐弘『天ハ自ら助クルモノヲ助ク 中村正直と「西国立志編」』、名古屋大学出版会、2006年
 - ・福沢諭吉 著、松沢弘陽 注『文明論之概略』岩波書店、2005
 - ・ひろたまさき『文明開化と民衆意識』青木書店、1980年
『差別の視線 近代日本の意識構造』吉川弘文館、1998年
 - ・フジタニ、タカシ著、米山リサ訳『天皇のページェント』日本放送出版協会、1994年
 - ・牧原憲夫『客分と国民のあいだ』吉川弘文館、1998年

明治前期の他者認識を巡って（ファクンド・ガラシーノ）

- ヤング、ジョン・ラッセル 著、宮永孝 訳『グラント将軍日本訪問記』新異国叢書 第2輯・9、雄松堂書店、1983年
- 百瀬響『文明開化 失われた風俗』吉川弘文館、2008年
- 山田享次 ほか著『米国前大統領哥蘭の公伝』学農社、1879年
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版会、1981年
- 郵便報知新聞刊行会『郵便報知新聞』（復刻版）1989年
- 『読売新聞』電子版
- 渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社、2005年
- Fellman, Michael, *Around the World with General Grant*, Baltimore, John Hopkins University Press, 2002
- Grant, Ulysses Simpson, *General Grant's Letters to a Friend 1861-1880*, New York, Boston, T. Y. Crowell & Co, 1897
- Hearn, Lafcadio, *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*, Edited with an Introduction by Elizabeth Bisland, London, Boughton Mifflin Company, 1910
- Headley, Phineas Camp, *The Life and Campaigns of General U. S. Grant*, New York, G. A. Leavitt, 1869
- Keene, Donald, *Emperor of Japan : Meiji and his World, 1852-1912*, New York, Columbia University Press, 2009
- Said, Edward, *Orientalism*, London, Penguin Classics, 2003
- Schecter, Barnet, *The Devil's own Work : The Civil War Draft Riots and the Fight to Reconstruct America*, New York, Walker, 2007
- Schouler, James, *History of the Reconstruction Period, 1865-1877, History of the United States of America under the constitution Volume 7*, New York, Dodd, Mead & Company, 1970
- Simpson, Brooks D, *Let Us Have Peace : Ulysses S. Grant and the Politics of War and Reconstruction, 1861-1868*, University of North Carolina Press, 1991
- Simon, John Y., ed., *The Papers of Ulysses S. Grant, Volume 29*, Carbondale, Southern Illinois University Press, 2008.
- Stamp, Kenneth M, *The Era of Reconstruction, 1865-1877*, New York, Alfred A. Knopf, 1965
- Waugh, Joan, *U. S. Grant, American Hero, American Myth*, The University of North Carolina Press, Chapel Hill, 2009
- Yokoyama, Toshio, *Japan in the Victorian Mind : A study of Stereotyped Images of a Nation 1850-80*, Basingstoke, Macmillan
- Young, John Russell, *Around the World With General Grant*, New York : Subscription Book Department, American News Co, 1879

（ファクンド・ガラシーノ）

大阪大学大学院文学研究科博士前期課程）